2018年1月22日発行　第44号

平成二十九年度読書感想文コンクール作品集

もさく

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

目次

講評、その他　図書館長補佐　一般科目　国語科教員　相本正吾……1

入選　第1位　『蠅』を読んで　情報工学科　四年　工藤琴乃……2

入選　第2位　『君の膵臓をたべたい』を読んで　情報工学科　二年　岸本うらら……3

入選　第3位　『虚ろな十字架』を読んで　機械工学科　二年　南　圭亮……4

佳作　十人十色の可能性
—『色弱が世界を変える　カラーユニバーサルデザイン最前線』を読んで　電気電子工学科　一年　上村知也……5

〃　『高瀬舟』を読んで　情報工学科　一年　廣瀬花菜子……6

〃　『坊っちゃん』を読んで　都市・環境工学科　一年　佐藤快成……7

〃　そうじで見方を変える
—『ディズニー　そうじの神様が教えてくれたこと』を読んで　都市・環境工学科　一年　庄司早理衣……8

〃　『ツナグ』を読んで　機械工学科　三年　川野健志朗……9

〃　『星の王子さま』を読んで　都市・環境工学科　三年　税所茉奈……10

〃　『エースナンバー　雲は湧き、光あふれて』を読んで　都市・環境工学科　三年　若菜遼甫……11

編集後記　学生図書委員長（機械工学科　五年）　髙橋雄文……12

校内読書感想文コンクール
（平成二十九年度）

講評、その他

図書館長補佐
一般科目　国語科教員
相本正吾

本年度は、国語科目の担当教員による第一次審査により一～三学年の各クラスから選ばれた優秀作及び四年生の自主投稿の作品を対象にして、教員図書委員及び学生図書委員による第二次審査、国語教員による厳正なる第三次審査を経て、「入選作」として三作（第1位～第3位）、「佳作」として七作が選出されました。

栄えある第1位に輝いた工藤さんの「『蠅』を読んで」は、実験的な試みが結実した横光利一の短編『蠅』の独自の小説世界に惹かれたという工藤さんは、この短編小説に対するユニークな分析を通して、人間たちと蠅の死と生のことまで深く考察していて、秀逸な作品となっています。自主投稿の上級生の作品の中では唯一の入賞となりました。

第2位となった岸本さんの「『君の膵臓をたべたい』を読んで」は、今年映画化された話題作を読んで、失って初めてわかるかけがえのない身近な大切な人ともっと心を通わせて大事にしていくことを考えていて、心打たれるものがありました。岸本さんは昨年度も第2位を得ています。

第3位の南君の「『虚ろな十字架』を読んで」は、幼い娘をかつて殺害された女性の登場人物の死刑廃止反対の論に注目しつつ、殺人を犯した者が負うべき償いや、遺族が要求せざるを得ない死刑というものについて考察し、死刑制度の意義について鋭く問いかけた作品になっています。

佳作となった七つの作品も、内容や表現において入選作に勝るとも劣らない力作が揃いました。色弱というハンデを前向きに捉えて生きる筆者に共感とエールを送った上村君の作品、ディズニーランドの清掃員の活躍の話から多くの教訓を学ぼうとする庄司さんの作品、亡き近親者との再会を実現してくれる人物「ツナグ」の物語を通してお互いに後悔しない生き方のことを考えた川野君の作品、名作『高瀬舟』を読んで人にとっての善悪や幸せについて考えた廣瀬さんの作品、同じく近代日本の名作である『坊っちゃん』の別れの場面を、自身の同じ体験に基づいて深く読み取った佐藤君の作品、近代西欧の名作童話『星の王子さま』を読んで人との出会いや繋がりの大事さを考えた税所さんの作品、高校野球の一部員の成長の様子に自身のことを重ねて部活における先輩部員のあり方を考えてみた若菜君の作品、いずれの作品も、傾聴すべきものがあり、読む私たち側にいろいろと大事なことを考えさせる作品となっています。

校内読書感想文コンクールへ向けて今回提出された各人の読書感想文の内容の傾向として、その本に表れた考えや物の見方をそのまま受け入れて、称えている作品が多かったように思う。読書の基本は、その本に述べられている情報や物の見方や見解を、読む側がよく吟味し考えてみて、取捨選択して、自身の内に取り入れて消化していくことにある。その本に記されてある疑わしい情報、偏った物の見方や考えに対しては、時に懐疑的・批判的に捉えていく姿勢を持つことが大切だ。「書を読んで考えないのは食べて消化しないのと同じだ」というエドマンド・パークの言葉は、読書においてはその書物の内容を自ら主体的に考えていく態度の必要さ大切さを述べたものであり、そういった読書の態度は、私たちが未来に向けて正しい情報と価値ある健全な物の見方や考えを得ていくために欠かせないものだ。

来年度の校内読書感想文コンクールに向けて入選を期する学生は、日頃から広い読書と文章作成の研鑽に励んで、入選を目指してほしい。

四・五年生の自主投稿も大いに歓迎している。次回は上級生の作品が複数入選していくことを期待したい。

第1位

『蠅』を読んで

情報工学科　四年
工藤琴乃

夏場の宿場は空虚であった。――これは横光利一の『蠅』の冒頭の一文である。私は以前授業で扱われたこの物語が強く印象に残っている。主人公のいない、姿のない第三者の視点で描かれた、一つ一つが短い十の章で構成された物語。私が惹かれているものは一体何なのか、この感想文を書くことで明確にすることにする。

登場人物は怠惰な馭者と、様々な事情を抱えた乗客達、そして一匹の蠅である。彼らを乗せた馬車は、物語も終盤になってやっと動き出す。崖道を行く頃、居眠りをしている馭者を気にもせず、馬は道に沿って歩き続けた。しかし彼に自分の胴と車体の幅とを考える頭はない。道を外れた車輪、傾く車体、馬もそれを支えることは出来ず、彼らは崖下へと落ちていく。助かったのは飛び上がった蠅だけであった。

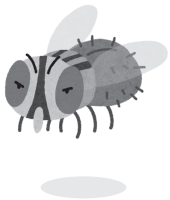
私がこの物語で注目した点は三つあり、その一つ目は蠅の存在である。この物語で蠅が何をしたかというと、ただ羽根を休めていただけである。それなのに題名になるほどの存在感を放っているのだ。この物語に主人公はいない。しかしあえて主人公を決めるとしたら私はこの蠅を選ぶ。淡々とした文章に語り手としての感情は不要だ。蠅に感情はない。ただそこにいるだけの存在である。乗客それぞれの抱えた事情を、内容に関係なく平等に扱えるのはこの蠅だけだろう。このことが何よりも蠅を主人公とするに相応しいと思わせる。

二つ目の注目した点は、それぞれが抱える事情と、それに伴う時間の感じ方である。息子が危篤の農婦は焦っている。彼女が感じる時間はきっと他者の数倍もの速さだろう。また、駆け落ちをしようとしている男女も農婦ほどでないにしても速いのだろう。逆に、やっとの思いで大金を手に入れた田舎紳士や、まんじゅうが出来るのを待つ馭者にとっては時間の進みは遅いに違いない。先に楽しみがあるならそれを手にするのが待ち遠しくてたまらないだろう。特に三章以降でたびたび見られる馭者と農婦のやり取りは彼らの時間を対比している。先刻馬車が出たことに焦る農婦に馭者の「二番が出るぞ」という声が届く。これを農婦は馬車が出るのだと思い喜んだが、実際には馭者は将棋をさしており彼女に答えたわけではない。その上彼はまんじゅうが蒸されるまで動くつもりはないのだ。農婦にとってのその数時間は息子が死んでしまうかもしれないという焦りで一分一秒も無駄にしたくないものだが、馭者にとっては蒸したてのまんじゅうを食べる喜びのための数時間である。二人の間の時間の流れは全く違うものであり、この対比は私達読み手をもどかしい気持ちにさせるものである。

三つ目は、物語の結末となる彼らの死である。あらすじにも述べたが、馬車が動き出すのは物語も終盤、九章になってやっとである。急いでいた農婦が乗り、そのあとを他の乗客が追う。腹掛けにまんじゅうを押し込んだ馭者も馭者台に乗れば馬車は動き始める。もちろん馬にとまっていた蠅も車体の屋根にとまり直してともに移動をしている。彼らは焦っていようが浮かれていようが関係なく、平等な速さで街まで揺られ、平等に崖下へと落ちていく。それを見送ることもなく、蠅だけは悠々と空を飛んでいき、物語は終わりとなるのだ。私は死んでしまった人々を不憫だとは思わない。もしも語り手の言葉に感情が描かれていたとしたら違っていたかもしれないが、この物語の語り手は蠅同様に感情を持たず、ただ淡々と事実だけを述べていく。馭者の怠惰によって引き起こされた悲劇であるのは確かなのに、感情移入する先が見つからないために怒りも悲しみも虚しさも湧かないのだ。このさっぱりとした後味が気持ちいい。また、感情移入がない故に人間の死も蠅の生も平等に受け止めることが出来る。私達は虫や植物から簡単に命を奪う。しかしそれを人間に向けてしまうと外道だと罵られる。これは私達が人間であるからである。もしも私が虫だとしたら、植

物だとしたら、そこに今と同じような感情や秩序があるならば、虫や植物の命を奪う人間は悪だと言うだろう。

冒頭で述べた私が「蠅」に惹かれる理由は、以上の三つから、全てのものに対する死の平等さを感じられることであると結論付ける。それぞれの事情やそれに伴う感情も、それ以前に生物の種類すらも関係なく、死は平等に与えられる。この物語で唯一助かった蠅も、そもそもは厩の隅の蜘蛛の巣にひっかかっていたところを運よく逃れたのだ。人間達とともに死ななかっただけで、この蠅に対しても死は訪れる。私達が今こうして生を受けている以上、死も同様に訪れるべきものなのだと改めて理解させられる作品であった。



第2位

『君の膵臓をたべたい』を読んで

情報工学科　二年
岸　本　うらら

膵臓の病気で僅かな余命を満喫しようとしている山内桜良と彼女の秘密を思いがけず知ることになった少年の物語である。少年は、半ば強引に彼女の「死ぬまでにやりたいこと」を遂行する相手として振り回されることになる。桜良と少年は行動を共にしていくうちに互いの気持ちは惹かれ合っていく…。しかし、桜良は不慮の事故に巻き込まれ命を落とすことになる。少年は彼女を失って初めて存在の大きさに気づかされたのだった。

人は失ってからそのものの大切さに気づくという。これを考えると人間は儚(はかな)くおろかな生き物なのだろう。けれど、少年は最初からこのように人間味の溢(あふ)れた人ではなかった。桜良とその周りの環境の目まぐるしい変化により成長させられていくのである。

その時の気持ちはその時にしか伝えられない。だが人は「明日が来ない今日もある」ということを知らない。だからこそ、ありがとうと思ったときは声に出して伝えなければならないと思った。ありがとうだけではなく、好き、愛してる、ごめんなどの言葉も思ったときに伝えなければならない。いつまでもその人が自分の側にいて笑ってくれるとは限らないのだから。お互いをもっと大切にしよう。いつ死ぬか分からないのなら必死に今を生きて、大切な人の側で笑っていよう。そう思った。

話を読み進めていくと、桜良の言動や生き方に、

「本当にこの子は死ぬのかな？」

という感情を持ち始めた。桜良は「今日が最後」という事を常に考える暇(ひま)もなかったのだろう。結局人は死ぬまでに一日の重みに気づくことはないのかもしれない。

すべての人間が今日、人生最後の日になっても悔いの残らない生き方をすべきだ。逆にすべての人間が何日も生きていくことを想定し、特別なことをせずにいつも通り生きていく権利があると私は思う。

私たちはいつでも死と隣り合わせだ。明日、明後日、何年後…ゴールとして確かに死というものはある。余命がないからといって、今日、明日に死ぬことはないという保証は誰にもないのだ。

自分が桜良の立場にたったとき、こんな幸せに生きられるのかと不安になる。この物語を読み終わった後、私は自分の人生をいかにつまらなく生きているのだろう、と気づかされた。思

い悩んでも解決できない事はこの世にごまんとあり、だったら悩む時間を自分の幸せになれる使い方をすればいい、という考えで生きている桜良が羨ましくなった。桜良のような生き方をする事で毎日が幸せでより充実した一日を過ごすことができるだろう。これから一日を過ごす中で、桜良のように幸せになれる事を考えながら生きていたい、と思った。死ぬのはきっと誰しもが怖い。だから、自分の幸せ、周りの人間の幸せを考えながら生きるのだ。明日も明後日も何年後も…私は生きたい。

第3位

『虚ろな十字架』を読んで

機械工学科　二年
南　圭　亮

「死刑は無力か?」というサブタイトルと一見何の関係もないように見える樹海の表示にひかれ、難しい内容を想像しながらも自分はこの本を手に取った。しかし、話が井口沙織と仁科史也の中学時代の青春物語から始まるという意外な出だしだった。そして、話が進み事件が起こる。ペット葬儀屋を営む中原道正のもとを、警視庁の刑事が訪ねてくる。佐山という刑事は、中原とは旧知である。佐山は、中原の前妻、小夜子が何者かに路上で殺されたことを告げる。中原は思わず「あのとき離婚していなければ、私はまた遺族になるところだった」と口にする。中原と小夜子には、かつて、幼い娘・愛美を殺されるというつらい経験があった。佐山は、その事件の時も捜査担当だったのだ。その後、すぐに犯人・町村が出頭する。中原は、死刑を望む小夜子の両親の相談に乗るうち、彼女が犯罪被害者遺族の立場から死刑廃止反対を訴えていたことを知る。一方、町村の娘婿である仁科史也は、離婚して町村たちと縁を切るよう、母親から迫られていた。そして、仁科史也と井口沙織の過去の過ちと小夜子殺人事件が結びつくとき、答えの出ない問いに立ち尽くす。

この作品で作者は、読者に「償いとは何か?」「我が子を殺されたら、あなたは犯人に何を望みますか?」「反省していない人の死刑は意味があるのか?」など難しいテーマを問いてくる。

自分は読後、将来自分が大人になり、我が子ができ、その我が子が誰かに殺害された時、その犯人に何を望むか考えてみた。そして、作品でも遺族が犯人に望むように、死刑という罰にたどり着いた。なぜなら、犯人に何かを望んだところで我が子が戻ってくることは絶対にないため、怒りというものも絶対に消えることもないだろう。そして、一つの命を奪っておきながら生きている犯人に死という罰をあたえたいと考えたからだ。しかし、犯人の死は決して償いにはならないだろう。では、償いとは何だろう。死刑は死刑でも犯人が反省しながらされることで、それは償いになるのだろうか。確かに少しはましかもしれない。だが、遺族にとって動機など関係なく殺していい理由なんて何もないと思う。そのため、犯人に深い事情があり、罪を反省したとしても決して同情し許すことはないだろう。結果、何をされても遺族が救われることはないため、死刑というものに償いは存在しないと思う。作品の最後で佐山と中原が「死刑というものは、矛盾している」と言う。確かにその通りだと思う。遺族からしたら死刑というものは何の価値もないものである。しかし、遺族はその何もないものを求めずにはいられないのである。

最後にこの本のサブタイトル「死刑は無力か?」について自分はこう思う。世の中には犯人の死刑（死）こそ最大の償いと考える人もいるだろうが、その死によって救われる人はいないと思う。だからといって犯人が生きていることは許せない。そのための最終手段が死刑というものであると思う。よって遺族にとって死刑とは無力だが最後の望みを叶える手段だと思う。結果、殺人者の自戒などただの虚ろな十字架でしかない。

佳作

十人十色の可能性
―『色弱が世界を変える カラーユニバーサルデザイン 最前線』を読んで

電気電子工学科　一年
上村知也

「先天赤緑色覚異常」それが今夏僕に告げられた異常であった。この学校に入学してすぐの健康診断で色覚検査に引っかかった。他の人は何も苦労することなく検査の本を読めていたが僕には何も見えないものがあった。他の人は本当に見えているのだろうか、そう思うほど見えなかった。電気科なのにこのような異常を持っていて大丈夫なのかと少しばかり不安を持つようになっていた。そんな時に出会ったのがこの本だ。これから僕がその本を読んで思ったことを書いていこうと思う。

まず僕の色覚異常は中度のものだ。時おり色の区別、特に緑系の色の区別がつけにくいことがあったが特に日常生活に支障はきたさなかった。一方この本の筆者は重度の色覚異常、いわゆる全色盲だ。さぞかし大変な思いをしてきただろうと僕は思ったが筆者はこの異常を受け入れるはおろかその異常に感謝していると言うのだ。筆者曰く、他の人と違った見え方ができうれしいそうだ。僕にはにわかに信じがたかった。しかし読み進めていくと分かったのだがこの異常があったからこそ出会えた人や出来事があったというのだ。それには僕も納得できた。この筆者は人生の出会いそのものに感謝している、だから色覚異常にも感謝しているのだと。異常が原因で他の人から怒られたり不思議に思われたこともあったがそれも人生の経験として受け入れているのだろう。そのようなことをきっかけとして筆者はＮＰＯ法人カラーユニバーサルデザイン機構を立ち上げたのだろう。その心意気と行動力は見習いたいものだ。

この本を読み進めていくと驚いたことがあった。それは筆者が一級カラーコーディネーターの資格をもっているということだ。色覚異常でない人でも難しいこの資格を全色盲である筆者が取るというのは至難の技であろうに。僕がその立場だったらそんな資格に見向きもしないだろう。色覚異常という言い訳をつけて。しかし筆者はその逆境を乗りこえている。僕なりに考察してみると筆者には意地やプライドがあったのではないだろうか。逆境を乗りこえる力。現代人に必要な力ではないのかと思う。理不尽なことの多い現代社会で必要な力だと思う。またメンタルもあったのではないかと考えられる。少なからず周りから変な目で見られたと思うがそれを耐えるメンタルにより合格をつかんだのではないだろうか。ここで思ったのは何かを成し遂げるには逆境を乗りこえる力とメンタル力であるということだ。思い返せば入試の時もそんな感じだったと思う。つまり人生での困難を乗りこえるのにはその二つの力が大切なのではないのだろうか。

この筆者は前記の通りカラーユニバーサルデザイン機構を立ち上げた。ここから思うのは「弱い立場のことは弱い立場からでないと分からない」ということだ。いくら普通の人が資料を読み漁ったり調べたりしてカラーユニバーサルデザインの製品を作ってもそれが使いやすいかは色覚異常の人にしか分からない。結局、弱い立場に手を差し伸べるにはその立場からの意見が必要なのだ。弱い立場からの意見なしで慈善活動をしたりするのは正直無意味だと思う。金銭的援助などで一時的には解決に向かうかもしれないが根本的な所から解決しないと意味がないのだ。結局何が言いたいかというと、上からの視点だけで物事を進めるのではなく下からの視点を含めて物事を進めて欲しい、ということだ。この考えが社会に広まれば今の理不尽な社会は少しは改善されるかもしれない。

いろいろ書いてきたが総合的にまとめて思ったことは「人生いろいろあるけど悲観したりしないで生きていれば何かは成す」といったことだ。才能だとかなんだとかそれに縛られていたら成せるものも成せなくなってしまう。そんな

人生もったいない。もったいなさすぎる。後悔したくない人生を送りたいのならどんなハンデを背負ってでもチャレンジするのが大切だと思った。人の可能性は本人の意思で決まる。その可能性を潰すのはナンセンス。自分の可能性を信じて生きるのが大切だと思った。

最初は色覚異常であることが嫌であったが今では少し誇らしくも思える。自分の人生に壁がある分、やりごたえのある人生が送れるからだ。自分の可能性を信じる、それが何よりも大切なのだ。

佳作

『高瀬舟』を読んで

情報工学科　一年
廣瀬　花菜子

幸せとは何か。何が善であり、何が悪であるのか。果たしてそれらは定義できるものなのであろうか。そう考えさせられた。

私が読んだのは明治、大正期を代表する文豪の一人である森鴎外作の「高瀬舟」だ。「高瀬舟」とは島流しを命じられた罪人を大坂へ護送する舟であり、この物語はその舟に乗る奉行所の同心、庄兵衛と弟殺しの罪で島流しになった喜助が主な登場人物である。

喜助は、島流しになった為、これから労働を強いられるのにやけに晴れやかな顔をしている。聞けば、今までの半生とこれから始まる生活を比較すると、喜助にとってはこれからの生活の方が良いのかもしれない、とのことだ。私は、平成に生まれ現代を生きているので、この時代の生活がよくわからない。だが、働いてご飯を食べられる。現在の日本では当たり前のことに対して喜助はこれ以上は無いような幸福を感じているのである。私たちは今目の前にあるものが満たされると、先へ、その先へとさらに満たそうとする。しかし、喜助にはそのような欲が一切見えない。私はそんな喜助にあまり共感できない。そして羨ましいと思う。欲がなく、一つ一つの小さな物事に幸せを感じられれば毎日が少しずつ楽しいものになるだろう。だからといって小さなことに幸せを見出せないことが愚かであるとは思わない。では幸せとは何なのか。誰かが答えを知っているとは言えなさそうな問題だと感じた。

また、この喜助は弟殺しの罪で島流しになっているが、それは罪と言っていいのだろうか。これも難しい問題である。喜助は放っておいてもいずれ息を引きとるであろう弟を自分の手で楽に死なせてやった。俗に言う「安楽死」である。「高瀬舟」におけるこの場面の回想は実に生々しく、現実的で、読んでいるこちらの胸も痛み、息が詰まるような思いになった。だが、あの場面で喜助が剃刀を抜かなかったらどうなっていたのだろうか。そう考えると喜助は善いことをしたと思えるしその行動が弟にとっての幸せであったと思う。けれども、所詮罪は罪、喜助は悪人としてとらえられてしまう。なんとも理不尽なように感じるが仕方のないことなのだろう。読みながらやるせない気持ちに駆られた。

「高瀬舟」を読み終えた時、すっきりしない、心に霧がかかったような読後感であった。何故そのような感じを受けたのか。それは私が客観的に喜助を取り巻く出来事を見たときに、誰も悪いことをしていないように見えたからだと思う。喜助のしたことを聞いた役人は罪悪感を持ったかもしれないが、皆自分が正しいと思ったことをしていて、誰も間違ったことをしていないように見える。それでいて、誰も救われたように見えないのがこの何とも言えない読後感を生み出したのだろうと私は考えた。

幸せとは何か。何が善であり、何が悪であるのか。自分にとってのそれは自分にしか定義できないものであり、自分が幸せだと思えばそれが幸せであって、自分が善いことだと思えばそれで善いのだ。最終的にそう考えることが出来た。だから私は、喜助のように自分が善いと思える行動をして自分の幸せを見つけたいと思った。勿論、法に触れたり、他人を傷付けたりしない範囲での話だ。自分の幸せのために、周りの人達に善い行動をしていこうと思う。

佳作

『坊っちゃん』を読んで

都市・環境工学科　一年
佐藤快成

私には大好きな祖母がいる。だが、祖母は遠くに住んでいるのでたまにしか会えない。

祖母の家の近くには小さな川があり、ザリガニやカエルがいる。また、夏の夜にはホタルが川面にきれいな星空を作る。私には自然いっぱいの小川に思えるが、祖母の目にはそう映らない。「ここも昔はフナやメダカがいたもんだが…」が口ぐせである。

私はこの本を読んだとき、清が祖母のように思えた。坊っちゃんを一途に思う清と、私を大切にしてくれる祖母。暖かく包んでくれる大切な人、それがふたりの共通点のように感じられた。

坊っちゃんは四国の学校に赴任することになる。清とは離ればなれに暮らすことになる。

駅で清と迎える惜別のシーンに胸が熱くなった。私が祖母の家から帰るとき寂しさがこみ上げるのと似た感覚になったからかもしれない。

この場面の描写は八行のみで実に淡泊である。別れに臨むふたりの心理は表現されていない。

しかし、その淡泊な写実ゆえ、さまざまなことが行間からあふれ出る。読者それぞれがそれぞれの切なさ、寂しさに浸ることができる。そのような意図がこの八行に込められていると思えてならない。

清は別れの際に「もう御別れになるかも知れません。随分御機嫌よう」と声にならない声で言う。

当時の別れは今よりずっと悲しかったに違いない。電話もない。手紙だって何日もかかる。もしかしたら清は字が読めなかったのかもしれない。蒸気機関車で行く四国は、地球の果てのように思えただろう。

列車が動き出しても、清はずっとホームで見送っている。

私が祖母の家から帰るとき、祖母は手を振って見送ってくれる。なんだか恥ずかしいが、窓から見る祖母の姿がだんだん小さくなるにつれて、数日の楽しい思いと同じ量の寂しさを感じてしまう。祖母の家が見えなくなる。それでも祖母はずっと手を振っているに違いない。見えなくても私にはそう思える。

赴任先の四国で坊っちゃんはさまざまな騒動を起こす。江戸っ子の気の短さと正義感、爽快ささえ感じてしまう。

坊っちゃんの行動は、騒ぎを起こしているだけで、何も解決していないことに私は気づいた。しかしながら、風見鶏のように風の向き次第で心が変わらない坊っちゃんを今の時代の人々は謳歌することだろう。

四国を離れるきっかけとなった赤シャツと野だへの天誅劇も、一見すると坊っちゃんの勝ちに思えるが、学校を辞めたのは坊っちゃんだ。赤シャツも野だも辞めていない。何もなかったかのように教員生活を続けている。坊っちゃんの行動は子どものいたずらに過ぎない。

しかし、小気味よさを感じるのは、勧善懲悪の単純な、日本人の根底にある純粋な民族性からかもしれない。

「坊っちゃん」は一人称で書かれている。まるで誰かに語りかけているようだ。その相手は恐らく清だろう。

最後のページに「清の事を話すのを忘れていた」とある。ここから終わりまで十一行に清との再会、その後の生活が描かれている。あたかも付け足しのような記述である。

だが、私にはこの十一行に、清と過ごした年月の思いが凝縮されているように思えてならない。

四国での生活よりも、清との生活の方が長かったはずである。たった十一行の文章だが行間には長い時間が書かれている。そして、その十一行には一人ひとりが大切な人との思い出を浮かべればよいのである。

この十一行は私にとっては祖母と過ごす時間である。短いかもしれないが、行間に含まれる時間と同じ分の大切な思いがそこにはある。

佳作

そうじで見方を変える
ー『ディズニーそうじの神様が教えてくれたこと』を読んで

都市・環境工学科　一年
庄司　早理衣

私は、鎌田洋著『ディズニーそうじの神様が教えてくれたこと』という、本を読みました。

この本は、ディズニーランドの夜間の管理者である金田が、清掃員とのやり取りを通してそうじの素晴らしさを教えてくれる話です。

私がこの本を読んだ理由は、母から勧められたことと、そうじの神様はどんなことを教えたのだろうと、興味がわいたからです。

私は、この本を読んで心に残った言葉が三つあります。

一つ目の言葉は、「ダメだと思っても、信じる心を共有することで、限界を越せるときがある」というものです。自分では、もう限界だと思っていても、それは、限界ではありません。諦めたときが限界なのです。この言葉は、お客さんが婚約指輪をどこかに落としてしまい、それを、清掃員が探しているときのことです。この清掃員の人も、私も、広いディズニーランドの中で指輪を探し出すことなど不可能だろうと、始めから諦めていました。でも、この言葉をかけられた清掃員の人は、自分で限界を決めず、根気強く指輪を探し続けました。その結果、指輪をみつけることができたのです。

私も、毎日の生活を振り返ってみると、自分で勝手に限界をつくり、始めから諦めていたことがあります。しかし、これからは逃げずに、色々なことにしっかりと向き合っていこうと思いました。

二つ目の言葉は、「そうじは、パレードやアトラクションを演出するための、舞台作りなんだ」というものです。この言葉は、冷え込む夜が続き、エリアをきれいにするためにまく水が、すぐ氷になって困っているときのことです。管理者である金田は、故郷が雪国の清掃員に「風が吹く日は氷がなくなる」ということを教えてもらいました。すると、数日後には数十機もの業務用扇風機が配置され、氷になってしまうという問題は見事に解決されました。

私は、誰の意見であろうと耳を傾け、それを実行に移すことのできる人はとても尊敬します。また、そのような人は、どんな壁に阻まれようとも、解決することができると思います。そんな人に私はなりたいです。

三つ目の言葉は、「自分自身が、夢を持っていないと、人に夢を与えることはできないよ」というものです。これは、大学にまでいかせた娘が、清掃員になって「これじゃ大学までいかせた意味がない」と母から反対されて、自分は親不孝なのだろうかと、心配しているときの言葉です。この清掃員の人は、多くの人に夢を与えたいと思って、この仕事に就きました。

私は、このような思いを持って仕事を選んだことに、とても感心させられました。私も仕事を選ぶときがきたら、この清掃員の人のように、人に夢を与えられるような仕事に就きたいです。

私はこの本を読んで、「そうじ」という一つのことを深く考えることによって、色々な見方が変わったことに驚きました。生活の中には、もっとたくさんの行動に溢れています。その一つ一つを深く考えることも面白いのではないかと思います。

佳作

『ツナグ』を読んで

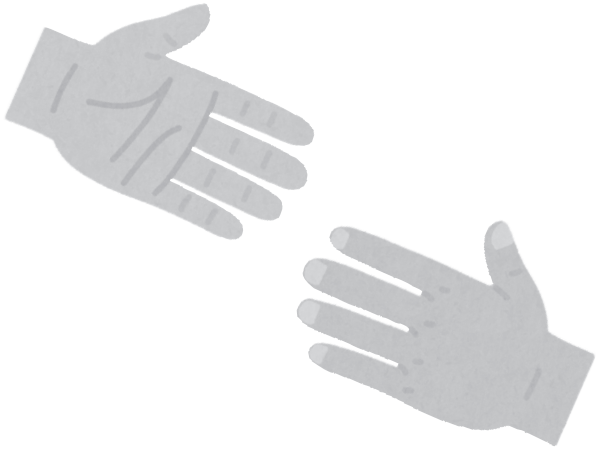
機械工学科　三年
川野　健志朗

もし亡くなった人ともう一度会えるとしたら、誰と会い、どんなことを話したいですか。辻村深月さんの『ツナグ』という本はそんな死者との再会を叶えてくれる使者である「ツナグ」を巡る物語を描いています。

「ツナグ」は誰でも一人だけ、そして一度だけ死んでしまった人に会わせることができます。私は「ツナグ」がこの世の中に存在しているのなら、曾祖母に会いたいです。私は幼いころ、いつもうるさく説教をしてくる曾祖母のことが大嫌いでした。怒られては反抗して、暴言を吐いたこともありました。そんな曾祖母は私が中学生くらいの時に亡くなりました。もう九十歳を超える高齢だったので、亡くなる前の病院にいたときから私のことを忘れてしまっていて、ちゃんと謝ることもできないまま息を引き取りました。今になって考えれば、あれだけ口うるさく説教してきていたのも、私のことを心配してくれていたからなのだと、理解できます。だから、もう一度会って、謝りたいです。そして感謝の気持ちを伝えたいです。ただし、曾祖母が会ってくれるとは限りません。「ツナグ」には一つルールがあります。生きている人が死んでしまった人に会えるのは一度きり、逆に死んでしまった人が生きている人に会えるのも一度きりなのです。つまり、私と会ってしまえば他の誰とも会えなくなるということです。曾祖母はきっと息子である祖父に会いたいのではないかと思います。祖父もきっと後悔していることがたくさんあると思うので、もし「ツナグ」がいても祖父に譲ることになりそうです。だから、死んでしまったとき私に会いたいと思ってもらえるように、誰かの一番大切な人になれたらいいなと思いました。

逆に、私自身が「ツナグ」の仕事をする側だったら耐えられないなと思いました。確かに会って話すことでわだかまりや心の淀みを解決できる人もいると思いますが、逆に状況を悪化させてしまう人も少なくないのではないかと思います。この物語の中でも、事故で死んでしまった親友に会って、もう親友に戻れなくなった人がいました。私はあまり心が強くないので、罪悪感や責任感に囚（とら）われて滅入（めい）ってしまいそうです。

さて、これまで「ツナグ」が存在した場合を考えてきましたが、残念ながら「ツナグ」は存在しません。そんな中、身近な誰かが急に亡くなったとして、もう一度会って話したいというような後悔を全くしないということは、絶対に不可能ではないかと思います。でもきっと、その後悔の数を減らすことは可能だと思います。だから、できるだけ後悔を減らすために努力していくことが大切だと思います。私がこれから、大切な人を亡くすたびにする後悔がなるべく小さく、なるべく少なくなるように努力し、逆に自分が死ぬときにも何もやり残したことがないように、日常生活から少しずつ改善していけたらいいなと思いました。



佳作

『星の王子さま』を読んで

都市・環境工学科　三年
税所茉奈

ある小さな星には小さな王子さまがいます。まだ幼くピュアな心を持った王子が、普段忘れがちな何かを思い出させてくれました。

砂漠に飛行機で不時着した「僕」は、幼い頃から大人に失望し、大人と子どもの価値観の違いを感じていました。そんな「僕」も、大人です。王子は大人は数字が好きで、具体的な価値などが無いとイメージ出来ず、評価もしないつまらないものだと思っています。そんな二人は砂漠で出会い絆を生み出します。

王子は自分の星を後に、いくつも星を巡り七番目に地球にやって来ました。旅の途中、たくさんの大人に出会い、たくさんの寂しく何か見失っている人生に遭遇しました。地球にはそういった大人が山ほどいました。ですが、王子は、「僕」と出会う前、一匹のキツネと出会いました。キツネは王子に絆を結ぶということ、大人たちが忘れてしまっている、一番大切な事は目に見えないということを教えました。

自分の星、大人たち、キツネ…。王子が旅から学んだことを聞いているうちに「僕」は、「僕」自身が大人になってしまったことを多々感じたと思います。次第に「僕」にとって王子はこれ以上無い程壊れやすい宝物となりました。

王子が地球に来て一年。王子は自分の星へ戻る事にしました。悲しむ「僕」に王子は笑う星々を贈りました。心で見ないと見えない最高の贈り物だと思いました。

私は、「この本を今手にとることが出来て良かった」と思いました。とても読みやすい本ですが、小学生の私が読んでもこの本の良さ、伝えたい事は理解出来なかったと思います。なぜならまだ子どもだからです。今私は高校三年生ですが、子ども心をあと少し持ちつつも、大人へと成長している段階です。子どもも大人もどちらの事も理解出来ました。綺麗なものを綺麗だと思うこと、誰かと心を通じ合わせること、大切な物は目に見えないということ。大人になってしまう前に人間の心の存在を改めて感じることが出来ました。

また、王子は旅を通じてたくさんの人々、動物に出会いましたが、私はそのことから人との出会いや人との繋がりの大切さを感じました。人間はやはり他者から学ぶ事が一番多いと思います。小さな王子、子どもを見習うべき点としてフットワークの軽さも大事な一つだと思いました。

私がこの本を読んで感じ取る事が出来たのは前述したことが大半を占めます。加えて、ストーリー、独特な世界観に感動させられました。しかし、本文が終わり、訳者・河野万里子さんによるあとがきを読んでこのお話に、著者であるサン＝テグジュペリ（アントワーヌ）の深い愛を感じました。主要な登場人物や動植物は、彼の家族をモデルとしていると考えられています。アントワーヌの生い立ちを知り、王子も「僕」もアントワーヌ自身がモデルなのではないかと思います。それを踏まえてストーリーをふり返ると、全て彼の人生の歴史で、彼がかげながら愛したもので、彼自身の後悔を描いている様に感じました。

この本がアントワーヌ生前の最後の作品となったそうです。彼の人生が詰まった一冊を初めから終わりまで読み終えた今、私はとても清々しい気持ちでいっぱいです。

佳作

『エースナンバー 雲は湧き、光あふれて』を読んで

都市・環境工学科　三年
若菜遼甫

「じぶん史上、最高の夏」

今年の甲子園のキャッチフレーズだったそうです。

「勝ち残りたい。一日でも、長く」

その一心で、それぞれにとっての最高の夏を目指すのです。その想いが報われるのは、約四千校中のわずか一校。その切なさに、私たちは魅入られてしまいます。私も、その内の一人でした。そして、私たちの代、九十九回大会も、先日、幕を閉じました。

この本は、三ツ木高校の弱小野球部の成長を描いた物語です。本を選んだ理由も、単純に、甲子園が好きだから、でした。しかし、読み進めると、いつもはただ感動していた高校野球の物語のはずなのに、どこか自分の痛い部分を突かれている気がして、落ち着かないまま読み終えてしまいました。

甲子園に限らず、私自身も、バドミントンで、高校生としての引退を迎えました。インターハイには出場することができませんでしたが、悔いはありません。ただ、思うことはありました。

先日、とあるバドミントンの大会に参加した際、中学生の時の後輩に挨拶をされました。後輩たちはみんな、バドミントンの強豪校に進学していて、直接試合をした子も、しなかった子も、きっともう、自分なんかよりも強くなっていて。みんなが初めてラケットを握った頃からを知っている身としては、嬉しいような寂しいような、羨ましいような、なんだか複雑な想いでした。大分高専のバドミントン部は、正直、あまり強くありません。だからこそ、ここでバドミントンの強豪校を選択しなかった自分が、本当に正しかったのか、今でも考えることがあります。

本気でバドミントンに向かっていく後輩、ひたむきに努力する三ツ木高校野球部を見ていると、一生懸命にバドミントンをできない自分に対する不甲斐なさを思い出しました。勉強を優先した自分、それを言い訳にしてだらだらとバドミントンをしている自分。

私は、バドミントンを捨ててしまったのかもしれない。本当はそんなことないはずなのに、こんな気持ちで部活をしていることや、部活のメンバーと接していることに、どこか罪悪感のようなものを感じていました。

ただ、それでも私はもう、バドミントンからは離れられないところまできてしまっていました。バドミントンは、三年生の、この夏までと決めていたのに、辞められませんでした。

これが答えなのかもしれません。だから私は、自分が納得するまで、バドミントンを続けようと思いました。

そしてもう一つ。この物語には、一度は野球部を退部した二年生、笛吹という部員がいます。部内で一番の能力をもつ彼が退部をしてしまったことには、様々な事情が絡んでくるのですが、そんな笛吹がチームに戻るために、色んな人、もちろん笛吹自身も健闘します。

私は、笛吹に似ているなと感じました。

「もし自分に、十年に一度と言われるほどの才能があったなら、また心のもちようも違ったのかもしれない。しかし幸か不幸か、笛吹は自分がそこまでのモノではないことは知っていた」

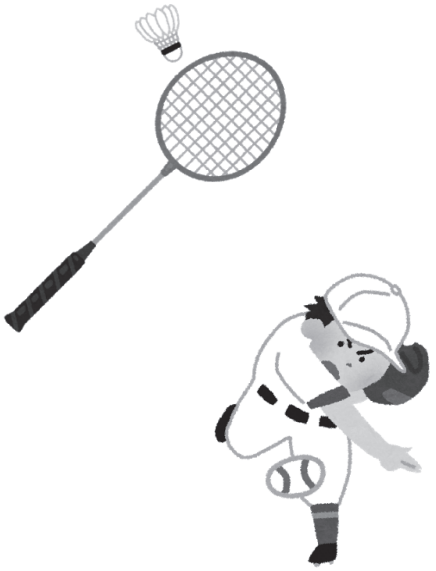
笛吹についてのこの部分、恥ずかしい話ですが、私はほんとうに自分にそっくりだと思いました。私は、中学時代も、高校生の今も、バドミントンに関しては一番でありたいと思っていて、それぞれ部内では結果を残してきた自負もあります。でも、その考え方の偏りに気づけず、誰かを傷つけたこともあったのかもしれません。それこそ、笛吹のように。自分が人よりも才能があること、それとともにその才能の限界も知っているからこそのプライドや葛藤があって。

そこで笛吹には、新しい監督や、幼馴染みのピッチャーといったメンバーの支えがありまし

た。もちろん笛吹自身の変化もありました。力を貸す・借りるじゃなくて、一緒にプレーをすること。野球というチームプレイの競技において、一番大切なことを思い出しました。バドミントンという競技の特性か、はたまた私の性格か、私は笛吹のように周りと衝突することはありませんでした。しかし、みんなが敵に見えてしまうこともあって、その気持ちを抑え込んできました。

だから私は、誰に対しても対等な目を持ちたいと思います。色も度もついていない眼鏡をかけます。私は笛吹のような人をつくらないために、受け入れる心を開きたいです。

どの学校のどの部活も、一・二年生の新チームはすでに始動しています。彼らが、今しかできないその一途さに気づける日まで、私は私のすべきことをしよう、そう思います。



編集後記

学生図書委員長
（機械工学科　五年）
高橋雄文

「出来るだけ長生きしたい」

そう願う人が大多数であることは紛れもない事実であり、もちろん私もそのうちの一人です。しかし然うは問屋が卸さない。諸研究によれば、医療技術の如何を問わず、人間は約百二十歳前後で死を迎えるそうです。ならば、できるだけ楽しく、様々なことを経験して最期の時を迎えたい。そんなことを思いながらふと目を向けると、そこには小説がありました。思えば小説は人の数より多いのに同じものはなく、全て異なる物語を持っています。従って、小説とはある種、疑似的な「生」であり、様々な小説を読むことはそれだけ多くの「生」を経験することになります。つまり、本を読めばある意味で人よりも長生きしていると言えるのではないでしょうか。

さて、そんな寝言はさておき、今回も多くの読書感想文が私の手元に届いてきました。いつも感じることですが、やはり皆さんの誰もが本を読むことが本当に好きなのでしょう。その思いを焦がし付けるかの如く鉛筆の黒が熱を帯びていました。と言いつつも、実際に手にしたのは刷られたてほかほかの作品でしたが。

そんな冗談は置いといて、今回も自分なんかが人様の文章に点数つけていいのだろうかと思いつつ審査させて頂きました。基準は前回と変わらず、感想文の内容や読み易さ、また投稿者の考えとその解かり易さとしています。今回渡された作品を読んで、皆さんの言葉の使い方や文章構成、引用の仕方や自己との対比等の文章力には本当に脱帽しました。皆さんの作品を読むまでは自分の文章力に根拠のない自信を抱いていましたが、その自信が打ち砕かれました。毎作品が素晴らしく、顰みに倣う気持ちで拝見しておりました。

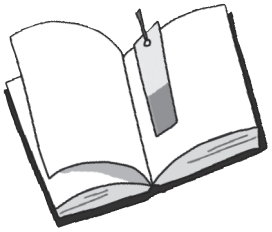
感想文の評価用紙を提出して後にふと思ったことがありました。それは審査員で投稿者に対し、お礼の意を込めて「読書感想文感想文」を認める、ということです。良かったところ、特徴的だったところ、改善点などを投稿者と共有できれば、次回の作品がさらに素晴らしい作品になるのではないかと思います。ご検討頂ければ幸いです。

私は入学当初から現在までずっと図書委員を続けてきました。今年はどうしようかなと悩んだこともありました。ですが、図書館の職員の方々や図書委員会の楽しいイベントがあったからこそ今日まで続けられました。自分が図書委員長になってからは委員会が中々締まらず、迷

惑をかけたことが多くありました。今年は堀先生から委員長の在り方についてご指導頂くこともありました。あまり委員長としてできたことはありませんでしたが、図書委員として過ごした五年間はとても心に残っています。来年度からは自分ではない図書委員長になるので、うまくやってくれると思います。お世話になった先生方、図書館職員の方々、本当にありがとうございました。今後は今までより多くの本を読み、質的に長生きできる様、読書と向き合っていこうと思います。

ここで宣伝となりますが、感想文以外の方法で自分の考えを伝える場として図書委員会主催の読書会というものがあります。気軽にご参加いただければと存じます。ちなみに、美味しいケーキが出ます！

それでは最後になりましたが、校内読書感想文コンクールを開催するために御尽力頂きました先生方、関係者の皆様、素晴らしい作品を投稿して下さいました学生の皆様、本当にありがとうございました。



平成29年度 読書感想文コンクール入選作品題材図書一覧

作品名	著者・訳者	出版社
蠅	横光利一 著	岩波書店
君の膵臓をたべたい	住野よる 著	双葉社
虚ろな十字架	東野圭吾 著	光文社
色弱が世界を変える　カラーユニバーサルデザイン最前線	伊賀公一 著	太田出版
高瀬舟	森鴎外 著	集英社／新潮社　他
坊っちゃん	夏目漱石 著	集英社／新潮社　他
ディズニー　そうじの神様が教えてくれたこと	鎌田洋 著	ＳＢクリエイティブ
ツナグ	辻村深月 著	新潮社
星の王子さま	サン＝テグジュペリ 著 河野万里子 訳	新潮社
エースナンバー　雲は湧き、光あふれて	須賀しのぶ 著	集英社

「もさく　第四十四号」

発行日　平成三十年一月二十二日

発行者　大分県大分市牧一六六六番地
大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

印刷所　三和印刷出版株式会社
住　所　大分市高江西一丁目四三三ー二三
電　話　〇九七ー五九六ー七七〇〇